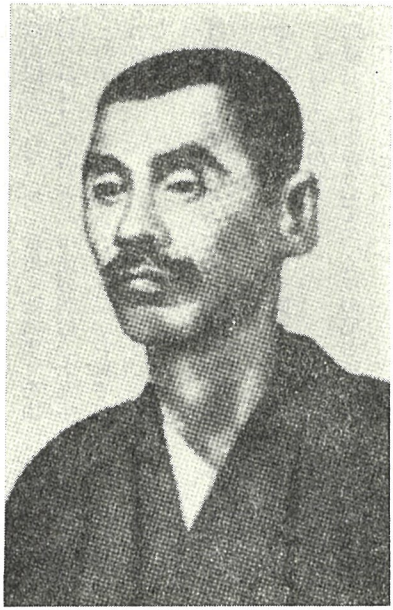


同志社人物誌　(61)

青山霞村

河野仁昭

霞村と同志社

口語詩歌の草分けであり、口語短歌運動の推進者であった青山霞村(本名・嘉二郎)は、同志社の校友である。

明治七月六月七日、彼は京都府紀伊郡深草(現・伏見区深草)小字枯木に生まれ、生涯のほとんどすべてをそこですごした。彼の同志社校友会入会は大正十四年三月で、そのときの校友会総会では、京都支部から同志社大学予科の教授を中心に十一名が推薦され、入会の承認をえている。当日の資料に、霞村については次のように記されている。(『同志社時報』二二七号付録、大正十四年二月)

「青山嘉二郎君　明治二十一年九月より同二十四年六月迄同志社普通学校在学、同志社校友会五十年史編纂委員嘱託」

初期の同志社では中途退学者を名簿などの記録にとどめることはなく、従って中退者の在籍の事実はきわめて確認しがたい。嘉村もその一人であった。

右の略歴に「五十年史編纂委員嘱託」とあるのは、入会以前にその委嘱を受けていたからである。『同志社五十年史』についてはあとでふれるが、彼が委嘱を受けたのは大正十三年九月で、そのときの紹介記事には、「同志社普通学校二十七年級の同窓である。北米スタンフォード大学に遊び、帰朝後は文筆に親しみ現に雑誌『犁』の主幹であり、著作に深草の元政、ブロンテー女史其他数冊ある」(『同志社時報』二二四号　大正十三年十一月)とある。

『明治文学全集　第六十四巻—明治歌人集』(筑摩書房　昭和四十三年九月)巻末の霞村の略年譜によると、彼がスタンフォード大学へ留学したのは、明治三十六年三十歳のときで、次のような短歌がある。

梅が香の吹くはどこからみちばたに牛草を食む春の夜の月　(ス氏大学のカレッジ、ターレスにいた時)

留学までに、彼は東上して早稲田に籍をおいたことがあったらしいが、病気のため帰郷し、その後、関西学院に学んだり、中学教員を一年間つとめるなどしたようである。(前掲『明治文学全集』)

スタンフォード大学で業なかばに病をえ、明治三十八年に帰国した霞村は、以後、深草

「池唐集」再版の表紙

に住んで著述に専念した。生涯独身であったのは、病弱だったためかもしれない。

口語短歌運動など

草山隠者の名で、第一歌集『池塘集』を出版したのは、帰国して一年後の明治三十九年十二月であった。次のような作品が収録されている。

手弱女のはぎりのやうに鳴く蛙はなも今宵
　の雨でちるやろ
雛を売る四条をにしへ室町や誰があとつけ
　るはるの夜の月
耶蘇君に不犯誓うたとつくにの尼も年とる
　われもとしとる

当時このようなくだけた口語で短歌を詠む歌人は、一人としていなかった。しかも明治四十三年には口語詩歌集『草山の詩』を上梓するのである。

口語の採用は、明治二十年ころから二葉亭四迷らが先鞭をつけ、山田美妙らもその採用を唱えてはいた。しかし新体詩に口語を用いることは容易でなく、せいぜい民謡調の試作がなされているていどであった。ようやく明治四十年ころになってから、自然主義の影響をうけて、川路柳虹や相馬御風らが口語詩を試み、短歌では石川啄木が明治四十三年に、口語をまじえた作品を書くのである。

霞村が口語を用いたのは、自然主義とは無関係であった。『池塘集』初版の「自序」に、彼は次のように記している。

「私は師友に二三の西洋人がありましたが、多くの洋人は日本語を話しても日本文の読める人は甚だ少い。まして日本の詩歌の解る人は猶更少い故に私は日本人は詩を作っても外国人に読ますことが出来ない誠につまらないことだどうかしてこれを日常の口語で書けないかと考えていました。丁度その頃二人の洋人が帰国しましたから送別の詩を俚謡体でなく全く言文一致の体で作りましたが、その時口語で詩を作るの不可能でないことを信じ、また和歌も同様だと思って以後屢詩歌を口語で作りました」

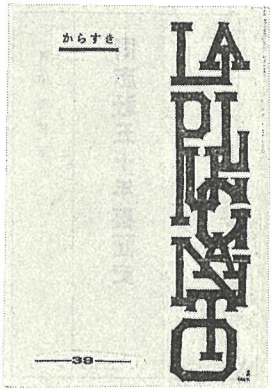
彼が口語で詩をかきはじめるのは、渡米の前、関西学院にいたときであるらしい。ただし、ここに書かれている西洋人というのは、関学での知人か同志社の教員かは詳らかでないが、外国人にもわかる詩をかいてみようというのが口語詩歌を始める動機になった、というのは興味ぶかい。こういう詩歌人も他にいなかったろう。

霞村は歌を「香川景恒門下であった深草の台巌上人」に学んだので、香川景樹（景恒はその嗣子）の桂園派に属する者だといい、景樹はその歌論から推せば「豆腐屋のゆく声すなり」とはいわず、必ず「豆腐屋の行く声がする」というはずだと、口語短歌こそはその正統な継承発展であることを自負してもいる（『池塘集』再版自序）。景樹はたしかに、「其御代々々の言葉をもて誠実の思いを述るのみ」（『歌学提要』）といってはいる。現代の桂園歌人を自認する霞村には、『桂園秘稿』など桂園和

歌にかんする編著書もある。

その青山霞村が、深草の里で口語短歌運動をはじめるのは大正中期ごろで、大正八年三月、自力で口語短歌雑誌『からすき』を創刊し、自らの作品や詩歌論を毎号に掲げるのはもちろん、読者の投稿をつのったのである。創刊の前年十一月に『池塘集』をからすき社の名で再版しているから、その前から準備をととのえつつあったとみてよい。この雑誌は一時休刊したこともあったが、昭和七年二月まで月刊で続けられた。

彼は究極の目標を、定型口語詩の普及においていた。その啓蒙運動に着手するまえに、まず三十一文字の定型詩である短歌の口語化によって、定型詩は口語でも可能であることを知らしめようとしたのである。彼にとって



口語短歌雑誌「からすき」

詩は、用語のいかんにかかわらず定型でなければならないのであった。

当時はアララギ派の全盛期であったためでもあるが、その運動ははかばかしい発展をみせたとはいいがたい。しかし東京でも西村陽吉や西出朝風らがこれに呼応し、一般からの投稿作品をも多数収録した合同歌集を、彼らとの共編で刊行するといった成果もあげている。西村陽吉は石川啄木の『一握の砂』などを出版した東雲堂の専務であった。また京都の土田杏村も、現代の短歌は現代のことばで詠まれるべきであることを強調している。ただし、杏村と霞村のあいだにどのていど意思疎通があったかは詳らかでない。

霞村はそうした運動を通じて、飯田武之輔、上田行夫、幹愴太その他の詩歌人を育てもしたのであった。

『同志社五十年裏面史』出版の経緯

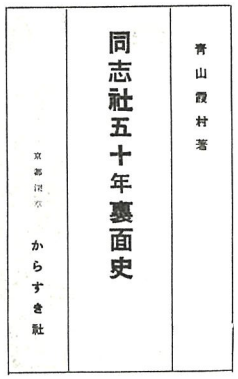
同志社校友会が『同志社五十年史』の編纂出版を、校友会の事業としておこなうことを決議をしたのは、大正十三年三月の総会においてであった。同志社創立五十周年を、翌年(大正十四年)にひかえていた。総会での提案者は中瀬古六郎と高木庄太郎であった。(『同志社校友同窓会報』一号　大正十五年九月)

校友会役員会では、協議の結果、青山嘉二郎(霞村)に編集委員を委嘱し、資料収集や執筆をゆだねることにした。大正十三年九月のことである。後年、霞村は「最初編輯長の故高木教授からローマンスを交へて生徒にも面白く読ませるやうな物といふ依頼であった」(『同志社五十年裏面史』の「緒言」)と書いている。

高木教授というのは当時法学部の教授で政治史を担当していた高木庄太郎である。彼は昭和二年十二月四日に永眠するが、霞村の追悼歌(『同志社校友同窓会報』十八号　昭和三年三月)に次のような歌があるから、二人はごく近所に住んでいて、面識があったらしい。高木の住所は京都市外深草四ノ橋であった。

をれのよいサマリア人とよんでゐた教授は
死んだ南隣の

霞村は大正十四年六月末に五十年史を脱稿して校友会に届けている。校友会役員会では浅野恵二、足利武千代、中瀬古六郎、高木庄



「五十年裏面史」の扉

太郎、西村金三郎の五名を委員として、霞村の原稿を検討した。その結果、「正史としては猶充分研究の余地あり、且材料貧弱の憾あるを以て、記念出版は之を見合せ、爾後も引続き、資料の蒐集を継続すべき旨」の結論に達し、霞村には五五〇円の手当と、編集費二十円を贈った。霞村は大正十四年七月三十日を以て編集委員を退いている。(『同志社校友同窓会報』一号)

翌十五年二月、校友会は編集委員会を抜本的に改組して編纂刊行に取り組むことになり、安部磯雄以下五十五名に委員を委嘱した。霞村もその一人であった。五十五名のうち加藤延年、竹林熊彦、徳冨健次郎ほか二名は辞退しており、校友会ではさらに十名ばかり委員を追加することにした。

しかしこの大世帯では動きがとれなかったらしく、昭和四年十月、ふたたび少人数の委員会に改め、中瀬古六郎編集長の自宅を編集室として、ようやく昭和五年七月に『同志社五十年史』は完成したのであった。最後の段階では、かなり拙速主義であった。

この正史の出版を待って、霞村が自らの原稿を『同志社五十年裏面史』としてからすき社から自費出版したのは、翌昭和六年七月である。「逸事佳話満載、明治文化史に異彩を放つ同志社の裏面史は一大史詩の如く書中に展開」(『同志社校友同窓会報』五十五号　昭和六年七月)されていると、同書の広告に記されている。高木の要請の趣旨に従って書かれたのではあろうが、霞村の面目躍如たるものがある裏面史だといえるだろう。

『山本覚馬』

右の裏面史が出版される三年前、昭和三年十二月に霞村は『山本覚馬』伝を同志社から出版している。その巻頭の「編者の言葉」のなかで、彼は次のように述べている。

「山本先生の伝記は往年一度編纂せられかけてその儘になり、拾年程前更に竹林〔熊彦〕氏によって一つの稿本が作られ、出来上った稿本は同志社主事広瀬重次郎氏が所持して居られた。一昨年広瀬氏がその稿本出版のことを谷村〔一太郎〕氏に相談せられた時、谷村氏は出版する為めの世話を承諾せられると共に、その稿本を改訂増補する希望を述べられた。それで広瀬氏はその担任者に就いて中村栄助氏に相談せられ、中村氏が私を指名せられたので私方に来られた。よって私は、その稿本を基とし私の心付いた方面の材料を集めて、増補改編したのである」

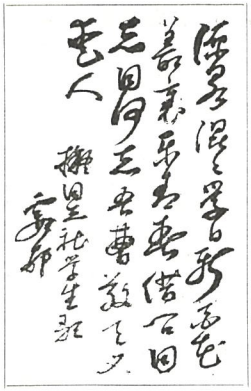
竹林熊彦は予科の教授で西洋史を担当するかたわら、『同志社時報』の編集にもたずさわっていた。大正十一年十一月発行の同誌に、彼は「盲目の偉人山本覚馬翁―管見を読む」というエッセイを掲載しているから、おそらくそのころ、同志社の依頼かなにかで覚馬伝の稿本をかいていたのだと思われる。しかし彼は、大正十四年三月に同志社を退職して九州大学図書館へ移ることになり、稿本は未完成のまま、同志社本部の広瀬重次郎主事に託されたのである。

昭和四年一月二十七日に、同志社では「故山本覚馬先生三十五年忌追悼会」を礼拝堂で

いとなんでいるから（『同志社校友同窓会報』二十八号）、その日を目標に、竹林が残して行った伝記の稿本を改訂増補して出版することになったのであろうと思われる。中村栄助は覚馬の謦咳に接しただけでなく、共に社員として草創期の同志社を支えた人である。霞村に依頼したころも依然理事であり、昭和三年十一月から翌年十月末まで、何度めかの総長事務扱をつとめることになる。

霞村は覚馬にかんして豊富な知識をもっていたとは思われず、裏面史でも覚馬についてはごく簡単にしかふれていない。ただ文筆の才能を中村栄助に認められていた校友の一人であった、ということから伝記稿本の増補改訂を託されたのであろう。

「編纂と刊行とは谷村一太郎氏の援助によった」ほか、十五六名の人々から有益な資料と助言を与えられたと、霞村は「編者の言葉」にしるしている。谷村から出版資金の援助もえたようだが、この人物については目下のところ詳かでない。発行者は広瀬重次郎（上京区室町上立売下ル）であった。



霞村の遺墨

霞村としては、偶然かかわることになった伝記であるが、山本覚馬にかんする資料は現在なおきわめて乏しいだけに、竹林にしろ霞村にしろ、決して容易な作業ではなかったものと思われる。その文献的価値は、裏面史と同様いまなお失われていない。

終焉

校友会入会後、霞村はときおり校友会の機関紙に短歌や長歌、漢詩などを寄せており、昭和六年九月に改造社の『現代短歌全集』第二十一巻に「青山霞村集」が収録出版されると、『同志社校友同窓会報』五十九号にはその紹介文を掲げるなど、校友会も彼をバックアップしている。昭和十二年六月には湯浅八郎総長らの後援で、「青山霞村口語歌創始三十六周年記念音楽会」が栄光館で開催されもした。創始三十周年の記念会もおこなわれたようである。参考までに、彰栄館の鐘を詠んだ彼の長歌を掲げておく。

闇の子の　悪魔の群が　ゆすっても　ゆるぎもしない　真四角な　煉瓦の館の　あらゝぎを　独で守り　その昔　苗木であった　庭の木が　天つ日隠し　縫上げの　きぬきてた児が　白髪たれ　祈るけふでも　昼も夜も　休みをしらず　夢の床　学びの窓へ　清い音送る（下略）

（『同志社校友同窓会報』十五号）

昭和十五年二月二十六日、霞村は伏見区深草瓦町の自宅で永眠した。六十七歳であった。その葬儀は京都基督教会で三月七日に営まれ、親友であった永井柳太郎や、歌人の佐佐木信綱らが、弔辞・弔歌を寄せた。（『同志社新報』四十五号、昭和十五年三月）

青山家は現在、霞村の甥策馬氏（昭和二年同志社中学卒業）が養嗣子に迎えられて継いでおられる。

（本部社史資料室室長）